



# 武者 行列

宇治の戦いに端を発した源平合戦。幾多の戦いの末に京を追われ、四国の最大拠点とした讃岐屋島における合戦にも敗れた。元暦二年、背水の陣で臨んだ壇ノ浦の戦いで平家は滅亡となる。そして全国三百数か所に及ぶ平家落人入山伝説が生まれ、その中でもこの祖谷が信じよう性が高いと言われている。

## 武者行列あらずし

**第一景 びわの滝**  
屋島合戦後に難を逃れた国盛主従は、阿波の国境で小さな焚き火を囲み、安徳帝の行く末を案じている。重臣の落合、小川も万策尽きようとしていたが、石立山の修験者、太郎坊と次郎坊のことを思い出す。そして繋ぎを受けた太郎坊と次郎坊も国盛の下を目指し阿波の国を出発した。太郎坊と次郎坊は国盛たちに、祖谷山、大枝名に源氏ゆかりの武集兵馬が居を構え、数百名の手勢を持って

いるが、戦を好む人物ではないことを話す。争いを起こす気が無ければ、受け入れてもらえるよう仲立ちの申し出をする。国盛主従は、幼い安徳帝を譲り、太郎坊次郎坊たちの案内により、阿波の国、祖谷山大枝名を目指す決心をする。

**第二景 かずら橋下流付近**  
武集兵馬を囲み配下の者たちが、国盛を迎え討つかどうかの相談をしている。そして大枝名近くで、武集兵馬の一群に国盛たちは行く手を阻まれた。

**第三景**  
武集兵馬に本心を問いたたされ、国盛は争う気持ちはないこと、この祖谷で穏やかに暮らしたいので受け入れてほしい気持ちを伝えた。兵馬もその気持ちに応え、名主に屋敷への案内を命じた。ここに、平家落人伝説の村には極めて珍しい、源平共存の村の第一歩が始まった。

**終章 かずら橋から陣屋へ**  
陣屋では、国盛と兵馬が並んで腰掛けて、その両脇を警護武者、重臣が固めている。国盛は帝にこの祖谷を、京の都になぞらえて生きていこうと話す。この地は京の上となぞらえ京上、向こうの山を醍醐山、前の川は

宇治川と呼び都をしのぶ。祖谷は伝統芸能が多く残され、今も唄い、踊り継がれている。また、平家落人が居を構えた謂われる大枝には、幹周り四国二位を誇る国盛杉が上空にそびえ、源氏ゆかりの武家屋敷が建ち、源平共存の村を物語っている。



※時代背景や登場人物など事実と異なる場合がありますので、ご了承ください。

粉挽き節日本一大会 (左上写真)  
祖谷そばの早食い大会 (右下写真)  
郷土芸能大会 (左下写真)  
武者行列 (左ページ)



# 祖谷 平家まつり

かずら橋夢舞台周辺(西祖谷山村善徳)で10月29日、「第1回祖谷平家まつり」が開催され、観光客など約1000人が訪れました。このまつりは、今年3月の合併を機に、旧東祖谷山村の「平家まつり」と旧西祖谷山村の「秘境祖谷のもみじ祭り」が統合され開催された催しです。

まず、特設ステージでは「粉引き節日本一大会」が行われ、県内外から参加した36人が自慢のものを披露しました。審査の結果、岡山市の津本由香倫さんが最優秀賞に選ばれました。その後行われた祖谷そばの早食い大会は、2分間でどれだけ量を食べられるかが競われ、参加者の見事な食べっぷりに会場からは歓声が上がっていました。これらのイベントの他にも国指定重要無形文化財の神代踊りなどが披露された郷土芸能大会やバザー、野点などの催しも会場周辺で行われ、参加者は秘境の秋を満喫しました。

まつりのフィナーレは、平家落人伝説を題材にした武者行列が行われ、地元の小中学生など105人が参加しました。よらい姿の平国盛や若武者、みこしに乗った安徳帝らが、祖谷のかずら橋近くのびわの滝横公園から夢舞台までの約1キロを優雅に行脚しました。